

曾我菊（尾花末露曾我菊）

へ頃しも建久四ツの年 皐月下旬に鎌倉殿 富士の御狩に警衛の
大小名が家々の 幕打ち廻す紋尽し へさしも軒端を連ねたる
飯家も今は跡もなく へ裾野に茂る篠芒 哀れ増穂の秋になお
二世の契りの祐成に 別れて袖の乾く間も 蹄く音すがれし虫
よりも 昨日に変わる虎御前 へ身は墨染に遊女の 仇なる色も
世を捨て、 仏に仕ふ尼法師 へせめては跡を弔はんと 道の案
内に頼みたる 里の翁が道すがら

「曇りし空も吹き晴れて 富士の高嶺に雲もなく
一目に三保の風景を 是にて御覧なされませ

へ旅路の憂さを慰むる 人の情も物思ふ 憂身に楽しからざれば
「其の風景より亡き人を 埋めし所へ参りたし
へ疾々案内してたべと 言ふに へ翁は指さして

「十郎殿を埋めしは あれなる小高き山の上
小松が墓の標なり

「あれなる小松が標なりとか

へならはぬ道に疲れしも 忘れてほとりへ走り寄り へ見れば千
種に埋もれし、 岡に一木の小松のみ 此が曾我の祐成殿を 埋め
し跡でありけるか へ世にある時は大磯の 長が許にて全盛な
大尽遊びなされしに へ如何に科ある身なりとて あまりと言へ
ば情ない 見る影もない有様と 暫し涙にくれたりしが へ尾花に
結ぶ白露の 風にはら／＼散るを見て

「露とのみ消えにし跡を來て見れば 尾花が末に
秋風ぞふく

へ哀れ身にしむ秋風の 詠歌に へ翁も感じ入り

「目に見えぬ鬼神も ひしぐは歌の徳とやら

へ山家育ちの親仁さへ 実にもと感じ入りまする
へ芒折り敷き休らへば へ虎はしるしの小松に向ひ

「供に天を戴かぬ 亡き父君の敵を討ち

名を萬天へ揚げ賜ふは 武夫の身の誉れなり
妾も共にと思ひしが 人の諭しに尼となり

へ後世を弔ひまゐらすれば 成佛得脱なし賜へ
へ南無阿彌陀佛彌陀佛と 珠数を爪繰り称名を 唱ふる馨の涼し
さに いとど殊勝に見えにける

「名僧智識の供養にも 優るあなたの其の御回向
成佛得脱疑ひ無し

「かゝるやさしき里人に 道の案内を頼みしも

一河の流一樹の蔭 これも他生の縁ぞかし

「海道一と名の高き 今を盛りの君なるに

緑の黒髪切り拂ひ 尼法師となり賜ふは
深き契りと存ぜられます

「問はれて語るも恥かしながら

へ祐成殿とは二世二世 後の世かけて言ひ交し 夜毎に通ふ磯千鳥
浮名は岸へ打寄する 波より高くなりし故

「一夜逢はねば千秋の 思ひに過ぎし皐月の末

へけふを名残りの門出に 乱れし髪をかきあぐる 湯津の瓜櫛夫の
顔見れば思ひの十寸鏡 へ別れともなく鳥鐘を 恨みし廓のきぬ
ぎぬは またの御見を頼めども へ其の甲斐もなく空に 蹄く死出の
田長の憂き別れ 血を吐く思ひで有りしぞと 又さめぐと泣きた
れば

「其の御嘆きは御もつとも 御いたはしく存じまする

「便なき妾を痛はしく 思ふ心の有るならば

祐成どのが討死せし 様子を語り聞かせてたべ

「オオそれは何より易き事 人の噂に聞きたる大略

是にて御話し申しませう

へしはぶきなして馨つくるひ

「御兄弟が討入の 其の日は皐月二十八日

へ朝まだきより雨降りて 御狩なければ祐経殿 あまたの遊女を
假家へ呼び 舞つ謡ひつたけなはの 酒宴も果てて人々が 枕に
就きし子の刻過ぎ

「時こそよしと箕笠に 姿を忍びよる戸口

へしるべの山はこなたぞと 内に手引の者ありて 念なう敵を討果
はせしるしをあげし折からに

「すは曲者が入ったるぞ

へ討取れやと呼ばりて 群り出づる武夫を 右と左へ切倒す
飛鳥の如き働きは 素袍に染めし蝶千鳥 敵にかちんの十番切

「かほど勇々しきお二人も

へ身は鐵石にあらざれば

「祐成殿は はかなくも

へ仁田の四郎に討たれ賜ひ へ時致殿は五郎丸に 搦め捕られて
引かれしと 今見る如く老翁が 語るを へ聞いて虎御前

「仁田殿に討たれしは 嚙口借しく思さんが 名もなき者に

討たれんより

へ遙かに優りし御最後と 亡き魂いさめ回向なす 長き嘆きに秋の
日の 短き日影裏富士へ をちこちに啼くむら鳥 へ暮れぬうち
と老翁が うながす詞に是非なく 杖を便に行く影を 招く
尾花に又後へ 心引かれて道のべに 行なやみたる折も折 神す
しめの宮神楽 へ斯くては果てじと夕露に しめる袂を振り拂ひ
舎りへ帰る新尼の 清き心を清元の 語り草にぞなしにける